

第二期 第一〇七号

(初版) (無料)

音信不通

本のビオトープ

学びあう人々のために

2025. 06. 10

定有堂書店

発行

後から現れる

小川のほとりで

福本和夫の「抜け参り」研究

階段の青空

生成AIと学びと

ロノウトギ星人と自己の範囲

読んでない読書(2) 仮想積ん読編

日々是雑言(ぞうごん) 5

With a little help from my friends 高木 善祥

本を作る側から(27)

内坪井町日記(13)

論語について(1)

臍の緒から逃れられない

散歩数寄

それでも書き続ける

あつくなるまえに

奈良 敏行

水原 涼

岩田 直樹

白井 明大

松田 裕史

板野 円香

おぎはらきえ

萩原 俊郎

村瀬 謙介

齊藤 仁昭

小原 修治

古賀 啓三

ムラカミヒロミ

三浦 永理

あきの素生

接続詞を捨てる

案内

編集後記

.....

奈良 敏行

ドラメリア

後から現れる

奈良 敏行

(定有堂 主人)

「『本屋のパンセ』を届ける、旅の終わりに」と銘打つて、「『読書室』セッション・イン・鳥取」が鳥取県民文化会館で行われた(二〇二五、五、十一)。主催は「定有堂教室」。

三砂慶明さんの「届ける旅」は、神戸の1003を皮切りに、紀伊國屋新宿本店、往来堂、ブックスキューブリック、ひろしまブックフェス、ジュンク堂芦屋店、そして最後が本屋「Little」での企画展、『「定有堂書店」という物語』で一巡した。

今回の催しは、それらの「届ける旅」の報告会だった。福岡からブックスキューブリックの大井実さんも参加され、

定員二〇人のはずが三十名を越えてしまった。

大井さんとわたしは不思議なきずなで結ばれている。大井さんは、開店をためらっている自分の背中を押してくれたのは定有堂で、恩人だとり返し発言している。そしてわたしからの手紙を、いまま大事に手元にとり置いていると言う。

《心が折れそうになった時、どうしても行きたくなくなったのも定有堂書店だった。(略)その後、奈良さんから届いた手紙には「右か左か迷った時は、まっすぐ行くのもいい」と書かれていた。心に響いたありがたい一文だった。》

大井さんの著書『ローカルブックストアである』（晶文社）には、右のように思い出が記されている。しかし逆に、定有堂を遠くの人に知らせたのは大井さんのそういう言説でもあった。開店前に鳥取で大井さんと話したときに、強くわたしが大井さんの成功を予感したのは、

《どんな店かとよく聞かれるが、そんな時は「セレクトショップ」といった言い方があまり好きではないので「小さな総合書店」と説明している。》

という構想だった。専門誌でなく総合雑誌、しかもエッセンスを圧縮した。この頃わたしもそろそろ町の中でのあり方を変化させねばと悩んでいたので、「すごい！これはいけます！」と熱くなったのだった。そのような合意で

井さんは開業し、わたしは棚のリニューアルを行った。自信を持って町の本屋を続ける背中を押して貰ったのはわたしの方だった。

三砂さんは著書の『千年の読書』（誠文堂新光社）の中で、「私のふだんの仕事は、本屋で本を売ることです。」という。三砂さんが多くの書店員と違ったのは、「私は本に人生を何度も助けられてきました」「なぜ人生には本が必要なのか」という読者として問いを抱き続けてきたことだった。やがてこの本屋と読む人を結ぶものは「読書そのもの」だと考えるにいたった。しかし「読書」を抽象的に語るのではなく、具体的に「読書会」の現場を知ることが大事と気づいた。その一つに「定有堂教室」があった。この場所では三砂さんは考えを深めたときくり返し述べることになる。

この三砂さんの「セッション」で、大井さんと三砂さんは、定有堂に背中を押されたと言語ののだが、わたしはそれは少し違うと訂正した。このところ何度か使っている言葉だが、それは「後出しじゃんけん」だと説明した。大井さんにわたしたちは「本屋の気概」を伝えたのだが、じつはその「気概」は大井さんからわたしが受取ったものだった。その受取ったものを大井さんに投げ返したのだ。これは後出しじゃんけんだ。三砂さんは「読書」という出口をわたし

に教わったというが、そういう出口への絞り込みを教わったのは実はわたしの方だった。「縮減」ということを希望の課題としていたわたしは、「本屋が読書に追い越される」とそれを概念化した。三砂さんに教わった希望だった。だからこれも後出しジャンケンなのだ。

「後出しジャンケン」という言葉は、定有堂術理の一つだが、辞書的にはどうも好意的な解釈が見られない。「ひきょうな一手」という説明が多い。術理と考えれば「後の先」という言葉がある。「返し技」のことだ。人に相談するとき、その人はほとんど正しい道筋の一手手前にたどり着いている。わたしはただ「まっすぐに」と返せばよかったのだ。

この会とちょうど同じ頃、『週刊読書人』に星野文月さんの『本屋のパンセ』評が掲載された。

『本書の中で何度か「目的が後から現れる」という言葉が出てくる。成果や結果ではなく、「行為そのもの」を信じて繰り返すこと。そこから生まれる「あそび」や「ゆとり」こそが、私たちの暮らしにさきやかな光をとますのかもしれない。』

あ、わたしが言いたかったことはそういうことだったのかもかもしれないと心が震えた。「行為の結果を動機としない」（『バガヴァッド・ギーター』）、それは「初発衝動」の

ことでもある。人は初発衝動で本屋をはじめ。その「私たち」そしてその目的は後から現れる。わたしがおぼつかない言い方をしてきたことは、そういう「後成（エピジェネティクス）」の物語だった。

三砂さんは、『二二の辻山良雄さんの言葉をこう教えてくれた。奈良さんは「理想に向かって手を伸ばし続ける」、「常に答えを出さない。だから問いが終わることがない」「それが本屋をやめても本屋的人間でありつづける理由だ」と語っていると教えてくれた。

2025. 05. 13

奈良敏行・三砂慶明編 『本屋のパンセ』 作品社 2025

大井実 『ローカルブックストアである』 晶文社 2017

三砂慶明 『千年の読書』（誠文堂新光社）

星野文月 『週刊読書人』 2025. 5. 9号

上村勝彦 『バガヴァッド・ギーター』 ちくま学芸文庫 2007

奈良敏行・三砂慶明編

『本屋のパンセ』 作品社

二〇二五年三月五日刊行



小川のほとりで

水原 涼

(小説家)

伏流、という言葉のもつ、水が地中で力をたくわえている

ようなイメージとは異なつて、都市の開発にあらがえずに暗渠に追いやられていたような流れが、比較的時間の流れのゆるやかな大学の構内でようやく息を吹き返すように地上に顔を出している。そこには人の腰の高さほどのない小さな滝が作られていて、絶え間なく水音が聞こえていた。キャンパスの南端にあるのに〈中央〉の名を冠された芝生の広場のなかを、蛇行して流れる小川だ。そのほとりで長い時間を過ごした。目の前に附属図書館があったから、借り出してきた本をそこで読んですぐ返したこともある。芝に寝そべって読んだ本の内容はまったく憶えていないが、背中のちくちくや蟻が身体を這い上がってくる感触は思い出せる。夏でも乾いた空気の冷ややかさも。六年半かけて二〇一四年の九月に大学を卒業したあとも、年度末の三月まで学生証の有効期限が残っていた。本は生協で割引にな

るし、附属図書館で借りることもできる。上京するまでの半年間、バイトと小説の執筆（ぜんぶ没だった）に明け暮れながら、不真面目な学生だったそれまでと同じくらいの頻度で大学に通っていた。川は短い橋をくぐって北へ向かう。傾斜のある芝生の底で、ときどきページから目を出して、道を歩く人を見るときもなく見る。図書館から出てきたかつての指導教官と目が合つて、部外者が何やってんの、とかからかわれることもあった。

北国のことで、そうやって一日を過ごせる季節はそう長くない。たまに友人を誘うこともあったが、だいたいは一人だった。正門からキャンパスのメインストリートに通じる道だから、いつでも誰かが歩いている。低い場所からの視線に気づかれることは滅多にない。それをいいことに、彼らの背中をじっと見送る。ラフな服装の学生が多かったが、背広の老人や赤ん坊を連れた親、観光客らしい数人連れもいた。建物や何かの陰で見えなくなるまで、彼らがこのキャンパスを訪れた経緯を考える。背中だけでは人となりなんて分からないから、想像はいつも無責任に広がっていく。同期入学の友人はほとんどがすでに就職していた。

文芸部に所属していたものの、一年生のころは、あまり会合に顔を出すことがなかった。新人賞を受けるまで、つまり、部の外で作品が認められて自信がつくまで、機関誌

に寄稿することはなかった。それまではただ、部内で親しくなった数人と作品を送り合って合評会をしていた。意見は食い違ふことが多かったが、全員がいつかはプロになるつもりで書いていた。でも彼らのほとんどが、インターンや就活のために執筆のペースを落とした。内定が出たあとにも再び書き出すことはなく、飲み会にはすでにいっぱい。会社員になったみたいなのスuits姿で現れて、いま応募したって受賞するころにはもう社会人になっちゃってるからな、と苦笑いしてネクタイを緩め、ビールを呷った。続く言葉はだいたいみんな同じだ。小説はきみに任せるよ。そうやって彼らは、創作への衝動を若さといっしょに過去に置いていった。それももう十数年前のことだ。リソグラフィの印刷機で手分けして刷った、温かいインクの匂いの残った何冊かの機関誌は、今も彼らの本棚にあるのだろうか。

そういうことを考えていたから——と、著者としての作業をほぼ終えた今にして思うのだけ——、六月に上梓する二冊の本、一つの長篇と八つの短篇には、いま何かを書いている、あるいはかつて書いていた人が多く登場する。彼らは著者の分身ではないが、三十五歳になった、ある小説の語り手が（過去の記憶や未来の夢よりも、むしろ仮定法の亡霊に悩まされるようになる）と述懐していた年齢に達した私の、書くことについての思考を、ちよつとずつ分

け持ってもらっている。

私はいま三十五歳で、三十五歳というのは今後の人生の見通しがついてきてしまう年齢だ。アルバイト以外に職歴もなく書いてきて、今から別の、一生の仕事を見つけられるとは思わない。探したいとも。デビューしてから今年で十四年になる。成果は理想より少ないにせよ、小説家として十四年目を迎えるなんて誰にでもできることではない、というくらいのは自負はある。あの小川のほとりで読んでいたころからずいぶん遠くに来た、と思うし、何も変わっていない、とも思う。

最後にあの街を訪れてから、そろそろ七年が経つ。二冊が出る六月、梅雨のない北の街は心地よく乾いている。そこではかつての私のような学生がハンノキの根元に寄りかかって、ときどき蟻を払いながら本を読んでいる。

引用：東浩紀『クオンタム・ファミリーズ』新潮社 2009.12

・水原涼『恋愛以外のすべての愛で』星海社 六月十八日発売

・水原涼『餓までの距離』集英社 六月二十六日発売

福本和夫の「抜け参り」研究

岩田 直樹

（再解釈本舗・「読む会」講師）

新年度に入ってNHKの町歩き番組「ブラタモリ」の新シリーズが始まった。旧シリーズの熱心な視聴者ではなかった私は、今まで面白そうなテーマを時おりつまみ食いしてきたに過ぎない。桑名から四日市、鈴鹿、津、松坂等の宿場町を経て外宮、内宮へ至る伊勢路九〇キロを歩く四回シリーズというので、毎週土曜日の夜、ビールを片手にボーツと観ていた。

先日、たまたま会った知人が「伊勢参りをしたよ」と教えてくれた。かなり前、出張ついでで予備知識なしに内宮―外宮の順で参拝したことがあり、ずつと気になっていたらしい。私は思わず「それは間違いだ！」と口に出してしまった。このたび正しい順序でお参りして、気分がスツと楽になったとのこと。「ブラタモリ」に触発されたわけではないようだ。

それにしても実に不思議だ。時代を超えて数多くの人々が聖地（霊場）を目指し歩き続けてきた。蟻が行列を作っている様子に譬えられた「蟻の熊野詣」。一ヶ

月以上をかけて一三〇〇キロを歩き通す四国八十八箇所巡礼。そして、お伊勢さん詣で。私は、巡礼の移動パターンには、厳密さを度外視して直線型、巡回型、収斂型の三つがあるのではないかと勝手に考えている。都から熊野三山に向かう熊野詣は直線型、四国遍路は巡回型、日本各地を出発して内宮を目指す伊勢参りは収斂型。例えば直線型の代表例は、八〇〇キロを歩く世界文化遺産のサンティアゴ・デ・コンポステーラ巡礼（スペイン）である。

数ある巡礼路の中でも、阿波、土佐、伊予、讃岐の四つの国を、それぞれ「発心」「修行」「菩提」「涅槃」の四つの「道場」と見なす四国巡礼は、本気度が違うという意味で別格だ。江戸時代に「伊勢に行きたい、伊勢路が見たい」と言われ、飼い主の代わりに犬が参詣したこともある伊勢参りは、別の意味での別格だろう。

「ブラタモリ」を観ながら、あれこれと思い巡らせるうちに、「ああ、そういえば」と思い出した。

ここ三ヶ月ほど、福本和夫（一八九四―一九八三）の著作群に目を通して。初期著作集（全四巻、こぶし書房）、著作集（全一〇巻、同上）全一四巻のうち、その三分の一も読んでいない。特に著作集は二段

組み七〇〇頁以上の「鈍器本」であり、本を読んでい
るだけで腱鞘炎になりそうである。寝転んで読んでい
るときに居眠りでもしたら大怪我だ。

四尺玉級の華々しい大花火が消え去る如く、「福本
イズム」は一瞬にして凋落する。日本の実情を一切考
慮しないコミンテルンの二七テーゼを無条件に受け入
れた同志たちによって、それまで礼賛されていた「福
本イズム」は、手のひらを返した思考停止者の批難に
晒された。失脚した福本は三・一五事件（一九二八年）
に連座して検挙される。一九四二年まで十四年に及ぶ
獄中生活を送り、今まで誰も考えたことのない「日本
ルネサンス論」を着想するのである。（「福本イズム」
と「日本ルネサンス論」の関係については省略。）

福本は出獄後、岩美町（旧大岩村）出身の橋浦泰雄
（一八八八—一九七九）を介して、柳田国男に教えを
乞う。橋浦は画家で、戦前は全日本無産者芸術同盟
（ナップ）委員長、戦後は東京都生活協同組合連合会
初代理事長を務めた柳田の愛弟子である。

そういえば、著作集第三巻「初期文化論」の中に伊
勢参りに関する考察があったはずだ。早速、『抜け参
りの研究』（北光書房、一九四三年）を読み始める。
著者名は福本ではなく吉岡永美（一八九四—？）。吉

岡は福本の出身地である北条村田井の東隣、前田寛治
と同じ国坂生れ。三人は倉吉中学の同級生で、吉岡は
東京帝国大学法学部卒、戦後は近畿大などに勤めた。
福本の名前では出版が難しく、友人の名前を借りた。

福本によると、「抜け参り」の「抜け」には二つの
意味があるという。古来、天照大神を祀る内宮は貴族、
豪族はもとより平民が参拝することはできなかった。
江戸時代に参宮が大衆化したことが「抜け」の一つの
意味である。もう一つの「抜け」とは、主人や親の許
可を得なくとも参拝する風習が定着したことである。

数百万人が約六〇年周期で伊勢参りを行った宝永二
年（一七〇五年）、明和八年（一七七一年）、文政一
三年（一八三〇年）の実態。本居宣長、太田南畝、滝
沢馬琴、司馬江漢、杉田玄白らの所見。国学運動、明
治維新との関係、等々。二五年後に刊行された藤谷俊
雄『「おかげまいり」と「ええじやないか」』（岩波
新書）と併せ読むと理解が進む先行的研究である。

最後に伊勢神宮に参詣したのはいつだっただろう。
熊野詣と合わせ技で、紀伊半島を一周したいものだ。

階段の青空

白井明大

(詩人)

荻窪駅前から歩いた大通りにはいくつかの記憶がにじんで、この先をずうっと行けば、もう十五年ほど前にもなるけれど、吉祥寺に住んでいた頃に子の七五三を祝った神社があるとか、懐かしいような、その後またたび訪れる機会のあつた界限で見慣れて親しみの湧くような、そんな街並みを見るときにもなく眺めつつ、それでも目的地の書店にたどり着けたときには少しほっとしながら扉を開けた。

本棚があり、本が並んでいる。その佇まいは一目で落ち着きを感じさせてくれて、よくよく推敲されたあとの文章のように一冊一冊の本がぴたりと自分の場所に収まっているのが伝わってくる。Titleという、この書店がなぜ読書家に愛されているのか、理由がすっと胸に落ちた。

こちらの二階のギャラリーで開催されていると聞いている、奈良敏行さんの著書『本屋のパンセ』『町の本屋という物語』刊行を記念しての展示、「定有堂書店」という物

語を見に、店の中ほど左手にある細い階段をのぼっていく途中、扉などで仕切られてはいない、階段をあがってすぐにギャラリーの空間に入っていくのだと、やや様子が見えてきて、少しの風の動きからも伝わってくる空間の気配を感じたとたん、うつすらと募りだすや、こみあげてくることとなった感情を覚えた。

二階へあがる細い階段といえは、遠い記憶としては幼い頃、沖繩の祖母に会いに行くたびに探検のように遊んだ首里の家の階段があり、最近では山口の友人夫婦が店を営む古民家の、広々とした風通しのいい二階の一間につづく階段があり、そのほかにもたくさん場所、たくさんの月日をとおして得た、こうしてのぼっていく感覚は体にしみついていて、その体験をまた新しく一つ重ねるように、感情のこみあげて熱を帯びてくる内面とはべつのところで、足がしっかりと段板を踏み、一段一段と、濃密な内実を湛えた空間のほうへ近づいていくことができた。

あの、袋川を渡る若桜街道沿いのガラス扉を開けてすぐの店頭にあるときは安西水丸『鳥取が好きだ』が、あるときは林明子『こんとあき』が飾られていて、店に入るなり手がのびてしまふ、あの、訪れるたびにいく冊も本を抱えて帰るよろこびをくれた定有堂書店が、魔法のように再び現われるということではなくとも、それでもやはりそこ

には息づいているものが、あったのは何だろうか。『町の本屋という物語』の表紙を飾る原画を見ることができたのは、個人的にうれしいことだった。

どれくらい以前のものなのか、古い小冊子の一冊を手にとりページをひらくと、ありし日の人の書きつけた言葉が当時の様子そのままであるかのように、時を経て訪れた部室の中でロッカーから拾いあげてばらばらとめくる部誌のような感覚で目にとまり、自分の知らない定有堂書店の積み重ねられてきた時間のあるひとときを垣間見る思いがした。

そこに何があったのだろう。何を感じ、階段の途中で感情がこみあげたのだろう。そのとき展示を訪れて感じたのは、きつと定有堂書店へ行く、という感覚そのものだったのだろうと思う。同じ場所が再現されていたのではなく、定有堂書店の営みや奈良敏行さんの思想を表わし、またその許に集うように飾られた展示物の一つひとつに込められている愛情の満ちあふれた空間に接しようとしてこへ入っていくさなか、伝わってきたもの、自分のなかに流れ込んできたものは、鳥取での日々で享受した、好きな本屋へと足を運ぶ感覚そのものだった。

粋なばかりというのはこのようなことではないかと思うのだけれど、二階にある本は、希望があれば定有堂の力

バーを掛けてもらえると展示室の壁に添え書きがあるのを見て、そのあいだは展示を鑑賞する気持ちから、書店に本を求めにきた気持ちへと切り替わってしまい、どれにしようかと探すまもなく手がのびたのは『伝えたいこと 濱崎洋三著作集』だった。鳥取で何度も見かけつつ、そのときはまだ時期ではなかったのだろうこの本に、都内を移動しながら読みはじめてすぐ惹き込まれることになった。「古代の鳥取」からも面白く、いまいるこの地の来歴を、その一端にふれることをつうじて、知る楽しみが目の前にひらかれた。

あの二階へとつづく階段の途中で胸にこみあげるように感じられたもの。それは定有堂書店だった。場所とはかぎらない、ある感覚としての、そのもの。もしあのとき頭上を見上げていたら青空が広がっていたはずだ。

(参考・編集部)

白井明大 『ヘリヤ記 Ⅱ《結び手》』 詩之友社 2025

白井明大 『日本の憲法 最初の話』 KADOKAWA 2023

白井明大 『着雪する小葉となつて』 思潮社 2021

白井明大 『一日の言葉、一生の言葉 旧暦でめぐる美しい日本語』 草思社 2018

白井明大 『生きようと生きるほうへ』 思潮社 2015

生成AIと学びと

松田 裕史

(高校教員)

勤務校では年一回、大学の先生にオンライン形式で生徒に講演していただく企画がある。基本的には言語・国際化・グローバルゼーション、多文化共生などがテーマとなる。私が主査をしているので、近年は生徒に有益な内容であり、かつ、自分も関心があり聞いてみたい講師をお願いしている(準備から実施に至るまで煩雑な仕事を一人でしているので、せめて自分の興味関心を大幅に加味してもバツはあたらないうと勝手に思っている)。

昨年は、立命館大学の山中司教授(生命科学部)にお願いした(今年もお願いする予定である)。山中先生とは英語ライティングの研究で去年から一緒にすることがあったので、直接お会いした時に下話をお願いした。その甲斐あって、快く引き受けていただいた。山中先生の御専門は応用言語学、言語哲学(プラグマティズム)、英語教育政策であり、著書も多数ある。最近は『AI・機械翻訳と英語学習』を出版されている。生成AIと言語教育については日

本の最先端を走っておられ、この一年でのマスコミ対応は百件以上だということだ。立命館大学は生成AIを先進的に授業で使用している。

「生成AI登場後の私たちと英語との関わり」果たして英語学習は不要となるのか!?」というテーマでお話をしていたのだが、英語学習に限らず今後の我々の生き方、在り方に関わる部分まで話は及んだ。話はミシェル・フーコーのエピステーメーから始まった。今まさに、私たちは前時代のエピステーメーから次のエピステーメーの狭間に立っており、その大きな地殻変動を引き起こしているのは言うまでもなく生成AIだ。「一身にして二生を経る」と福沢諭吉は言ったが、私たちも今、同じ立場にいるということだった。

Chat GPTについても言及していただいた。世界の全ての本を読んでいるChat GPTは万能のように見えるが実はそうではない。ブレインストーミングや要約という活動においては極めて有能でありどんなに使えばよい。しかし、具体的提案や交渉文書の対訳では頼ってはいけない。一般的な解は秒速で出力することはできるが、オリジナリティーが求められる活動は得意ではないので、そこは人間の守備範囲である。意思決定の軸は人間にある。英語についてもビジネスコミュニケーションにおいては不測の展開があり、

一般的な解では解決しないことは頻繁に起きるので、相変わらず英語学習は必要である。しかし、そのレベルは英検で言えば準一級以上であり、二級以下であればAⅠで対応できるとのこと。ということは、大学は英語をツールとして考えている限りは、大学入試でも英語が必須ではなくなってくるかもしれない。英語が幅を利かせているのは政治、経済、戦争などの言語そのもの以外の要因が大きいので、本来は多言語が学べる環境が理想的だと私は思う。大学側も英語を今後も入試科目とするのであれば、生成AⅠ時代にふさわしい意義を示してほしいものだ。それは文部科学省とて同じで、実施されてまだ四年目の学習指導要領はもう時代遅れになっている。なにしろ、生成AⅠ登場前に作成された内容であるので仕方ないが、現場では待ったなしの状況が生まれている。生成AⅠ時代に私たちはどのような生きしていけばよいのか、生徒から質問が出た。それに対して山中先生は頭を抱えて、「分からない」と言われた。その場で即答できるような問いではなく、時間があれば、考えていらっしやるのが聞けたと思うが、それは次回のお楽しみとしておこう。

生成AⅠなどによる自動翻訳が劇的に進化したので外国語を学ぶ意義がなくなったとは、私は考えていない。今や言語以外の面でも人間を遥かに上回る情報処理能力を生成

AⅠは実装している。東大の入試問題でも合格ラインを超えるようになったという話を聞く。外国語だけではなく、数学、古典、理科、歴史、地理などでも生成AⅠにはもはや勝てないので全科目学ぶ必要がないという極論が出てくる。しかし、そうではないだろう。教えている生徒達にも次のような荒唐無稽なことを授業で吹っかけてみた。「AⅠは万能のツールです。AⅠは膨大なデータをもとに考えることができ、どんな問題に対しても解決策を提示することができます。Chat GPTのような生成AⅠは学力も素晴らしい。共通テストを解かせると8割近く解答できる科目もあります。いくら努力しても情報処理能力ではAⅠには勝てない。正確性と効率性は人間のそれよりはるかに優ります。君たち高校生はもう勉強しなくてもいいですよね。」生徒達は必死に自分たちが学ぶ意義を再確認し、再構成しようともがいていた。ユヴァル・ノア・ハラリは、生成AⅠはツールではなく、人類に脅威を与えかねない行為主体であると断定している。様々な知見が出揃いつつある中、私自身も生成AⅠ時代の学習観、指導観をアップデートしなければならぬ。

ロノウトギ星人と自己の範囲

板野 円香

(薬剤師・岡山県在住)

漫画作品の中には、時に思いがけず哲学的な問いを投げかけてくるものがある。『果ての星通信』という作品を読んでいる、そんな瞬間があった。

『果ての星通信』は、宇宙の運行を担う組織「果ての管理者」の支部局で突如働くことになった地球人の青年・マルコと、様々な文化や形態を持つ異星人たちとの出会いを描いた、異星間交流譚である。

その中で次のようなエピソードがある。

マルコがセンターで働いていると、一機の宇宙船が不時着する。中から出てきたのはロノウトギ星人という、全身フワフワの毛で覆われた異星人たち(映画:アダムス・ファミリーのカズン・イットに近い。知らんか……)。

彼らには一つの特徴がある。全員が「同一のオス個体のクローン」であるということだ。そして彼らは故郷に残る一体の彼女に想いを託し、銀河中から「愛のかたち」を収

集する旅をしている。

壊れた宇宙船を修復中、不測の事態が発生する。積み荷を吊っていたワイヤーが切れ、一体のロノウトギ星人の幼体が下敷きになってしまうのだ。地球人のマルコは幼体の命を救おうと、積み荷を放り投げて救助に向かうのであるが、周りのロノウトギ星人たちは消えゆく命に見向きもしないばかりか、「彼の命は替えが利く」「積み荷は我らの人生、粗雑に扱うな」と一蹴するのであった。

かつての私ならマルコに共感し、「紙きれよりも命が大切だ」と異を唱えたであろう。しかし、「命よりも大切な紙切れがある」事を知ってしまった今は、異星人たちの気持ちも痛いほどよく分かるのだ。

かつて、地動説が神への冒瀆とされていた時代があった。コペルニクスやガリレオが太陽中心の宇宙を描いた時、彼らは命の危険を冒してまで「事実の方」を選んだ。現実には、地動説を唱えた学者が火刑に処された例もあったし、科学思想の本を地下で複写し、命がけで継承した人々もいた。そのとき燃やされそうになったのは、ただの書物ではない。未来の誰かが「知」に触れられるように、幾世代が命をかけて受け渡してきた「記録」なのだ。命より重いと言われた理由は、そこにある。

そう思うと、あの異星人たちが怒った理由も理解できる。

替えが利くコピーが失われるより、「長い旅で得た貴重な記録」が失われる方がよほど致命的なのだ。

もう一つ、このシーンで考えたことがある。「目の前の一体のコピーは、大きな自己の一部に過ぎないのではないか」という事だ。

脳科学者ジル・ボルト・テイラーは、その著書『奇跡の脳―脳科学者の脳が壊れたとき―』（新潮文庫）の中で、脳卒中によって左脳が機能停止し、右脳のみで捉えた世界を詳細に記している。彼女は次のように述べる――「これまでの『からだの境界』という感覚がなくなつて、自分が宇宙の広大さと一緒になつた気がした」。それは自己が個としての輪郭を失い、流動する存在へと変容する瞬間であつた。

要するに自己とは、左脳による記号的な縁取りによつて出来た副産物であり、また、固定化された実体ではなく、認識のスケールや視点の持ち方によつて、大きくも小さくもなる境界線を差すのであろう。

通常、私たちは料理中に指を切つてしまつたとしても、そこに居たはずの細胞の死を憐れむことは無いし、絆創膏を貼り何事もなかつたように調理を続けるだろう。つまり、細胞の一つ一つは替えが利く状態であり、その集合体が私という一つの個を成しているのである。細胞にとっては、

私たちはまさに集合を生きるロノウトギ星人なのだ。

クローンの異星人にとつての自己は、百体全体で一つの生命。地球人の青年にとつては、目の前で苦しむ一体がかけがえのない命。テイラー博士にとつては、世界すら自己のうちに溶け込んだ。

『音信不通104号』でアイデンティティについて書いたが、そもそも自己とは儚い生成物であり、異星人たちの命の重さも「どこまで自分とみなしているか」という、後発的な嗜好の一つに過ぎなかつた。そう考えると、私の悩みの種が少し軽くなるような感じがした。

て事を考えながら冷凍庫を開けたらアイスがなかつた。わ・た・し の抹茶アイス。許さない…（↑いまココ）

（参考）

メノタ 『果ての星通信』全5巻 主婦と生活社

ユリイカ 『コペルニクス 2023.1号』 青土社

ジル・ボルト・テイラー 『奇跡の脳―脳科学者の脳が壊れたとき―』 新潮文庫

読んでない読書(2) 仮想積ん読編

おぎはら きえ

(蔭山)

「図書館日和」というスマートフォンアプリを利用して、普段利用する図書館を登録して本の検索をすると、その図書館に蔵書があるか調べてくれる。蔵書の有無だけじゃなく貸出中かどうかまで表示してくれるし、該当図書館のホームページの予約登録画面までとんでくれる、図書館へビュースターには大変ありがたいアプリである。検索した本は「読みたい」「予約した」「借りた」「読んだ」の四つのカテゴリで登録できる。

この「読みたい」のカテゴリに登録した本が先日ついに千冊を超えた。新聞の書評や広告、SNS、書店で見かけて気になったらとりあえず登録していたらこんな数字になった。

遡ると、登録一冊目はデヴィッド・グレーバー『負債論』（以文社）だった。二〇一七年二月二日の朝日新聞の書評を読んで登録したものだ（メモ欄もついているので、私

は登録日と情報源を記録している）。鳥取県立図書館で借りようと書棚を探し、見つけた瞬間その分厚さ（八四八ページ）に怖気づいて借りるのをやめたのを覚えている。

次は藤田省三『天皇制国家の支配原理』（みすず書房）、井上俊夫『初めて人を殺す』（岩波書店）、奥村和一・酒井誠『私は「蟻の兵隊」だった』（岩波書店）、本多勝一・長沼節夫『天皇の軍隊』と、こういう感じの本が十冊以上並ぶ。これらは「読んだ」カテゴリ登録一冊目で、日中戦争での日本軍の残虐行為を追及した、辺見庸『1★9★3★7』（金曜日）の中で引用されていて興味を持った本だ。実際「読みたい」から「読んだ」カテゴリに変更できたのは堀田善衛『時間』（岩波書店）だけである。

「読みたい」カテゴリを見返してみるといろいろ思い出が蘇る。

木俣由美『ゼロからはじめる法学入門』（法律文化社）、神田将『図解による民法のしくみ』（自由国民社）。詐欺師を相手に詐欺をする男を描いた漫画『クロサギ』で、主人公である詐欺師専門詐欺師の黒崎が独学で法律をめっちゃ勉強しているの読んで「カッコいい」、私も勉強しよう」と思ってたチェックしたのだった。結局勉強していない。井上陽水、えのきどりちろう『井上陽水全発言』（ベネッセコーポレーション）。当時の職場の上司がカラオケで「心

もよう」を歌っていて、改めて井上陽水を聴きハマった頃だ。「昼寝をすれば夜中に眠れないのはどういう訳だ」って、『東へ西へ』の歌い出しすごいね。

香西秀信『レトリックと詭弁』（筑摩書房）、同著者『論争と詭弁』（丸善出版）。ひろゆきの「論破」が流行ったときだ。ネット上で繰り広げられる論点ずらし、話のすり替え、極論、暴論、侮蔑に恐れおののき、そんな輩と対峙したときのために備えておかねばと登録した気がする。幸いそんな輩と対峙するハメになったことは今のところない。

渋沢栄一『論語と算盤』（興陽館）、島田昌和『渋沢栄一』（岩波書店）。大河ドラマと新札の肖像で渋沢栄一が話題になっていた頃だろう。市民講座か何かの講演で渋沢栄一の業績や思想を聞いて興味をもち登録したんだ。

このように当時を思い返せる「読みたい」本もあれば、「なんでこれを？」と思うような「読みたい」本もある。メモ欄には登録した日付と情報元（書評、広告、SNS）しか記録していないので、具体的にどこに惹かれたのかはもう記憶にない。

國重惇史『住友銀行秘史』（講談社）、横尾宣政『野村證券第2事業法人部』（講談社）。実際の金融・経済事件を扱ったドキュメンタリーだが、私この分野にめっちゃ疎

いのに…。

廣瀬陽一『中野重治と朝鮮問題』（青弓社）。中野重治の作品も読んだことないのになぜ…。

小西甚一『古文研究法』（筑摩書房）。古文読めるようになりたかったのかな…。

「積ん読」という言葉がある。読もうと思って購入したものの読まずに自宅に積んである本のことを指す。私の「図書館日和」に登録している本は買わずにデータ上に記録しているだけだが、これも一種の積ん読といえなくもない。見返すと書影や概要も表示されるので「ああ、読みたい！」と気持ちしが再燃する。お金を消費しないし自宅の空間を潰すこともないし、弊害がない分「気になる！」という反射神経でばんばん登録し、延々とリストをのばしている。

ところで、千冊目に登録した「読みたい」本は松本則行『山菜・野草の食いしん坊図鑑』（農山漁村文化協会）だった。大学生が研究でそこら辺に生えてる野草を採取して食べているという話を聞いた。どんな草が食べられるんだろうとネット検索した中で参考図書として紹介されていた一冊。いつか野草採取して天ぷらにしてみたい。

（著作）

おぎはらきえ『迷妄蒙昧』 蔭山 2025

日々是雜言（ぞうごん） 5

萩原 俊郎

（倉吉市在住者）

日ごろ気になることを、つれづれなるままに。

インド人もびっくり

民放のBSテレビを観ていたら、人生相談の番組に出てきた女性のヨガ指導者が「ヒマラヤ秘教」という耳慣れない宗教を口にしていた。さっそく、ググってみる。

最近、グーグルは頼みもしないのに「AIによる概要」がいきなり出てくる。「ヒマラヤ秘教は、ヒマラヤに伝わる約五千年以上前の秘密の教えで、特別な実践法を通して悟りや真の幸福へと導く教えです」。スラスラと出てきた。「サマデー」「カルマ」などサンスクリット語も随所に出てくる。

でも、「五千年以上前」？ まだインダス文明（四千五六百年前）も生まれていないぞ。ヒンドゥー教やサンスク

リット語を生んだアーリア人が、イランを経由してインドに侵入したのが、ようやく三千五百年前。五千年以上前という設定は、いささか無理があるのではないか。

「AIによる概要」をよく見ると、どうやら、先ほどのヨガ指導者のサイトから全て引用されたものと判明した。で、彼女はその秘教を継承する「ヒマラヤ大聖者」だそうである。当たり前の話だが、ヨガは坐禅と同じく、宗教ではない。あくまで心身を整え、自分を見つめる手段だ。

AI、まず疑うべし。こいつは、しれっと、知ったかぶりをする。五千年前、ヒマラヤには一体だれが住んでいたのだろう。「インド人もびっくり」の話である。

終（つひ）のクルマ

税金の季節。同年輩の友人が「けき届いた自動車税の額を見て、びっくり」とグチをこぼし始めた。日本で新車から十三年経た車は、自動車税で約15%、自動車重量税は約40%も増税になる。年金暮らしには痛い。

もちろん、理由はある。古い車ほど排気ガスや燃費など環境負荷が高い、と思われている（実はそうでもない）。

「どんどん新車を買えというのか。欧州では古い車は逆に減税されるのに」と友人はなおも食い下がるが、それはS

DGsよりも「車は文化遺産」というお国柄だからで、か
といつて減税対象となる三十年(独)や五十年(英国)も
昔の旧車を維持するには、カネも手間もかかる。

私の車(2014年製VW)もそろそろ増税だが、燃費
はいいし、他に気に入った車もないので、免許返納の日ま
で「終(つひ)のクルマ」にするつもり…などと書いてい
ると、充電5分で400^キ走る驚異のEVカーを開発した
中国のBYDが、日本でしか走っていない「軽自動車」の
分野に参入する、というニュースが入ってきた。

かつて自動車王国アメリカに殴り込みをかけた日本みた
いで、こりゃあ、本気だ。

低価格で、なおかつAIを使って高齢者の運転をサポート
してくれる軽自動車なんて売り込んでくると、これは日
本車も危ない。アメリカの二の舞になるかも…と、かく言
う私も「終のクルマ」なんて片意地は張らず、とつとBY
Dに乗り換えているかも知れない(笑)。

『暗殺の森』

BSで以前録画していたベルナルド・ベルトリッチ監督
の『暗殺の森』(1970年)をようやく観た。

『ラスト・エンペラー』で知られるベルトリッチの出世

作で、映像は美しいのだが、ストーリー(アルベルト・モ
ラヴィア原作)がなんとも陰鬱で、なかなか観る気になれ
なかった。

主人公はムッソリーニ政権下のイタリアで哲学講師をし
ている。自身はスノッブな俗人なのだが、懸命にファシズ
ム社会に順応しようと秘密警察に自分を売り込み、亡命中
のかつての大学の恩師を暗殺するためパリに向かう。

ファシズムの始まりには決まったパターンがあつて、そ
れはまず大学や学者を血祭りにあげることだ。「反知性主
義」とも言える。イタリアもそうだし、ナチスドイツでは
アインシュタインやフロイト、哲学者のアーレントらが亡
命した。日本も軍部台頭で京大滝川事件が起きている。

実はこの映画を観ようかと思つたのは、ハーバード大が
やり玉にあげられているのを知ったからだ。トランプ、前
からだれかに似ていると思つていたが、『ドラえもん』の
ジャイアンでなく(笑)あのムッソリーニだった。

得意げにふんぞり返った仕草、過去の栄光への執着(と
いってもムッソリーニの目標は古代ローマ帝国だが)、議
事堂襲撃はローマ進軍(1922年)に似ている。米国で
ファシズムは明らかにもう始まっているのだろう。

With a little help from my friends

高木 善祥

(SHEEPSHEEP BOOKS)

先日、松崎で行われたZINEフェス「アート・ブック・フレンズ」に出店してきた。ZINEとは、個人や少人数グループが自分たちで制作・出版する小冊子のことで、日本でも定着しつつある。（歴史や定義づけの話を始めるとややこしいので割愛）

私自身はZINEを作っていないので、お店で仕入れたものを中心に、ZINEを作ってみたい人のヒントになりそうな本を持っていた。

印象的だったのは、来場者の滞在時間の長さ。それほど広くはない会場を何周も回って、出店者つまり製作者と直接じっくり話して、買うものを決める。「売る人と買う人」というよりは、「伝えたい人と知りたい人」という関係。主催者・出店者・来場者が一体となって楽しんでいて、とても素敵な時間と空間だった。

当店のブースで二番目に売れたのは、この「音信不通」

四月号で参考文献に挙げていた『陶芸家 高野友美にきく 地方と独立』だった。まずツカミが面白く、かつ「実際、地方で独立ってどうなの？」と、誰でも考える不安が率直に語られていて、このイベントの趣旨に合っていたように思う。

一番売れたのは、若い友人のKさんとNさんが制作した「Save a Point」。日記／旅行記／エッセイ／ポトフォリオ。これらのどれかに当てはまりそうで当てはまらない、いろんな読み方ができる作品だ。

ちなみにイベント当日、お店の方はこのKさんにアルバイトで入ってもらった。

きっかけは四月初旬。お客さんとして来ていた時に、

「出店する時は店を閉めないといけなくてさー」

と雑談がてら話したら

「じゃあ私やりましょうか？ 本屋で働いてみたかったの」

で即決。ぎっくりとレジの使い方だけ説明していきなりワンオペと無茶ぶりしてみたが大きなトラブルはなく、今は月に二回ほどお願いしている。自分とはキャラも接客スタイルも違うので、どんなお客さんが来たか聞くのを、毎回楽しみにしている。

*

買取依頼があった方のご自宅へ、二度目の訪問。最初の訪問時に、「実はジャズのレコードとCDもあって」と相談を受けたので、近所のレコードショップ店主・Mさんを誘う。各々で箱詰めなどの作業を行い、先にレコードを積んでいったんMさんの店まで運び、戻って今度は本を積み、自分の店で下ろす。運搬作業も手伝ってもらい、お互いの苦勞をねぎらう。

Mさんとは二十年以上のつきあいでも、お互いの店にフラッシュと顔を出して、音楽や本の話をする関係が続いている。

お預かりした本のリストを作りながら、一冊一冊状態をチェックする。小説・エッセイ・仕事関連の専門書・民藝・画集・郷土資料と多岐にわたっていて、貴重なものも多い。ほとんどの本に、ギャラリーからの案内はがきや美術館・コンサートチケットが、葉代わりに挟んであった。旅行する際は、必ず現地の美術館に寄っていたそうだ。

そしてリビングには民藝の器・ロッキングチェア・ランプシェードが、文字通り「日々の生活で使われるもの」としてそこにあつた。

地方の文化はこんなふうに、地元の経済人／文化人の方々に支えられていたことを実感する。

そういえば、亡くなった私の母も「吉田璋也先生に扁桃

腺を切ってもらった」と話していた。地域医療と民藝運動は地続きだし、歴史は今と地続きだ。

母と同年代の奥様からお聞きした鳥取大火や戦後の苦勞も興味深く、つい色々と質問してしまった。

自分自身のこととは特に語りたいと思わないけれど、話を聞くのは好きなので、色んな人にインタビュしてみようかと思っている。

【参考文献】

『ガールズ・メディア・スタディーズ』田中東子 北樹出版

女性はどうのように表象され、また自らを表現するのか。ZINEフェス運営スタッフの皆さんを見て思い浮かんだ本。『INSECTS「本をつくって本を売る」』インセクツ
変わり続ける本を取り巻く環境を楽しもう。

定有堂ビル2階 古書・新刊の本屋

SHEEPSHEEP BOOKS 店主 高木善祥

本を作る側から (27)

村瀬 謙介

(小取舎)

アレルギー性鼻炎との付き合いが長い。一枚のティッシュを器用に両方の鼻の穴に詰めて生活する私の姿を、家族や親しい友は見慣れている。年中そのような状態というわけではなく、風邪をひいた時や気温の変化、花粉や黄砂が舞う季節には必ず鼻に白い花が咲く。そしてなぜか今年の春は酷かった。副鼻腔炎じゃないか？医者にかかっていないのでわからないが今年は副鼻腔炎になった人が全国的に多いらしい。ティッシュの消費量が半端ではない。環境破壊に加担しているのではないかとさえ思う。

自分主催のDJイベントを年に2、3回くらい開催している。そのイベントの告知にインスタグラムやX（アプリの更新をしていないのでいまだにツイッター）を使っているが、以前からずっと紙のチラシ、いわゆるフライヤーも印刷して配っている（ちなみにフライヤーの語源は、戦時中、飛行機からチラシをばら撒いて配布していたことから Flyer と呼ばれるようになったらしい）。大体ハガキくら

いのA6サイズで作ることが多く、デザインも自分で行い、紙質にもこだわり発注する。できたものは一緒にイベントを行うDJさんたちに渡すほか、服屋さんやレコードショップ、飲食店などに置かせてもらう。

居酒屋に置いてもらう際にちよっと一杯。隣の席にはたまたま昔からの音楽繋がりの知り合いがちびりちびりと瓶ビールを飲んでいた。私のイベントのフライヤーを渡すと「いやあ、紙のフライヤーですかあ。やつぱり良いですねえ」と肺に吸い込むようにして紙の匂いを嗅ぎ、うっとりとした目でグラスに残ったビールをクイツと呑んだ。なかなか紙の匂いをアテにしてお酒を飲む人は見たことがないが、気持ちいはわかる。

印刷所から上がってきた新しい本の匂いは良い匂いだ。紙の製造時、原料のパルプに含まれるリグニンが酸化分解してバニリンというバニラの香りの主成分物質が出る。基本的に良い匂いの正体はこれだと言われているが、紙の種類は無数にあるし、本によって匂いが違う。紙そのものだけでなく、インク、装丁に使われる素材、さらには断裁機の刃にかけるスプレーの匂いや印刷所・製本工場ごとで変わってくる可能性があるという。そういえば本屋や図書館

に行く」とトイレに行きたくなるといったことがあるが、これは「青木まり子現象」という名前がついており、諸説ありすぎるので割愛。本と匂いに関連する事象はたくさんあるし、またその魅力に取り憑かれている人もいる。鎌倉では二〇一九年から「本を嗅ぐ会」が開催されていたり、出版社ごとの本の匂いを調べているライターさん（宮部みゆき『チヨ子』がいい匂いらしい）もいたりして、目に見えない本の魅力もあるんだなあと再認識した。ただし、書店で本を嗅いで回るのは変な人として見られるのでお控えください。

さて、二〇二五年一月から着手した本がついに完成した。『音信不通』第二号より連載されてきた内田克彦氏の記事をまとめた書籍『鳥取あれこれ』だ。掲載時には文字数制限もあり、省いた部分も今回掲載することができた。校正に次ぐ校正で、しかも内田さんと何度も実際に肩を並べて修正したり新事実を追加したりと、正直、小取舎じゃなかったらもっと時間がかかっていたかもしれない。

毎回、本を制作する時に思うのだが、知らないことを知ることができ、本当に勉強になる。小取舎の本を全冊、一番何度も読んでるのはおそらく、というか当たり前なの

だが私である。鳥取のことを扱っている本ばかりなので、仕事をしながら鳥取の知らないことを知ることができ、なんて幸せな仕事なのだと思う。『鳥取あれこれ』には「鳥取砂丘殺人事件」という付録もついている。今回も表紙デザインを自分で行い、製本は得意のペーパーバック。これを書いている今、まだ本が仕上がっていないので早く嗅ぎたい。

・小取舎の最新刊

『鳥取あれこれ』

内田克彦 著

2025.5 発行

本体一〇〇〇円

『宇沢弘文「社会を治す」
社会的共通資本の再解釈』

岩田直樹 著

二〇二四年七月二九日発売



内坪井町日記(13)

齊藤 仁昭

(ケバブジョンソン・

元長崎書店勤務)

四月某日

ロー・ボルジスのライブ盤、『TENIS+CLUBE
AO VIVO NO CIRCO VOADOR』ばかり聴いている。通勤の車内でずっと聴いている。通勤時間が長いことがこんなにうれしいだなんて。

あまりに好きすぎてChat gptに、街角クラブが好きすぎると告白してしまった。するといろいろなことを教えてくれてたいへんためになった。特に好きな曲のコード進行も教えてくれたのでギターで弾いてみたが、「tudo que voce podia ser」は全然弾けなかった。「otrem azul」はなんとなく弾けたが、シンプルなんだか複雑なんだかわからない不思議な曲だった。しかしなんどまあ響きの豊かなことよ。

ネットをいろいろ探してもDVDが見つからないのであきらめかけていたのだが、どうせなかろうと思ってYou

Tubeで検索してみたらなんと全編アップされていた。すぐケバブの皆にラインしたが、観てくれただろうか。

この企画の何がいいかと言うと、アルバムのアレンジと音色を忠実に再現しようとしていることである。ボルジスの向かって左手にいるギターと鍵盤を弾いている人がバスマスなのであろうか、おちついて全曲を仕切っているように見える。

家でもずっとみていたら子も気に入ったようで一緒に何度も聴いた。次男はこのバスマスと思しき人物が気になるらしい。理想のロックバンド。こうなりたい。

四月某日

四月末、小岩のBUSH BASHでGO FISHと共演した。店長がブッキングしてくれたのだが、我々でよいのだろうかと思いがけない組み合わせで正直うれしかった。GO FISHのテライ氏はギター一本の弾き語りなのに、アレンジの鳴らし方がバンドの演奏を聴いている気分になった。声と曲と歌詞、その全部にどこか冷めた孤独感があつて、でも突き放すような感じではなく優しさを感じた。

終演後に少し話す時間があり、共通の知人の話や「バン

ドっていいよね」などという会話もできた。我々の力不足でお客さんは多くなかったが（テライ氏は名古屋在住なので僕らが集客がなければならないとため）、演奏も会話も充実したいい夜だった。

五月某日

余韻に浸っていたのだけれど、こちらの労働生活には余白がない。ゴールデンウィークは無休で、節句の商品づくりと母の日の商品づくりの対応に追われた。

今年も「出世鯉」を販売した。練り切りで形作る立体の鯉の生菓子なのだが、手間がかかる上に、年々売れ行きは右肩下がり。それでもいい菓子だと思っている。

五月某日

連休明けに、部下ふたりとビールを飲み、街に出た。ふたりが好き（自分も好き）な熊本市の市街地にある「オーデン」という各国のビールを出す店へ出向いた。ふたりともよく飲みよく食べるので見ていて気持ちよかった。孫を見ている爺さんの気分。

連休中も休まず働いてもらい、劳いのつもりだったが、

結局こっちの方が元気をもらうというか酔っぱらってしまった。そういうことがもう何度もある。

五月某日

熊本県菓子工業組合の総会。お歴々が集まり、年次の報告ののち、懇親会。

総会の前には「菓子道場」という持ち寄り会があった。テーマは「明治時代のレシピ再現」。骨董屋で見つけた熊本の菓子屋のレシピ帖にあった配合を手がかりに、十人ほどがそれぞれ菓子を作って持ち寄った。予想以上に美味しくできたものもあり、皆で感心しながら食べた。地元 テレビや新聞の取材も来ていた。この模様を展開し、六月のデパートでの催事でパネル展と試作の試食をせねばならない。私が担当になってしまっているが、雪もちの販売と、とても焦っている。

論語について(1)

小原 修治

(県立高校教諭 湯梨浜町松崎在住)

子曰、学而時習之、不亦説乎、有朋自遠方来、不亦樂乎、人不知不愠、不亦君子乎。(学而篇第一・第一章)

子曰「い」はく、学びて時に之「これ」を習「なら」ふ、亦「ま」た説「よろこ」ばしからずや、朋「とも」遠方より来「き」たる有り、亦「ま」た樂しからずや、人知らずして愠「うら」みず、亦「ま」た君子ならずや。

本章が『論語』の冒頭に置かれた意義については、從來、「子曰」以下の三節「学而時習之、不亦説乎」「有朋自遠方来、不亦樂乎」「人不知不愠、不亦君子乎」の意味的な連関に注意して論じられてきた。「此の章三節は皆な孔子一生の事実なり」(阮元「論語解」)などがそれである。が、本章の最大の特徴はその三節の末尾がいずれも「不亦く乎(亦「ま」たくずや)」となっていることであり、何

よりもこの点に注意して本章は論じられるべきだろう。

例えば、伊藤仁斎は「凡そ『論語』の諸章は、直ちに一時の言を記せる者有り、異日の語を併録せる者有り、数言を綴輯して以て一章と為せる者有り」(『論語古義』)と述べるが、本章はその三つ目の事例と見ることができ、その上で、「数言を綴輯して以て一章と為せる」理由を、意味的な連関ではなく、姿形的な類似にあると考えるのである。無論、人は常に既に連続する言葉に意味的な連関を見ってしまうものであり、それは否定出来ないとしても。

ともあれ、本章三節を本来別々の章として考えてみると、第一節については、楊樹達が「学びて時に習ふは即ち故(ふる)きを温(あた)む。故(ふる)きを温(あた)た」めて能(よ)く新しきを知る、故に説(よろこ)ぶなり」(『論語疏證』)と説くのが注目される。『論語』為政篇に「温故而知新、可以為師矣。(故「ふる」きを温「あた」めて新しきを知る、以「もつ」て師と為すべし。)」とあるのを踏まえるが、「温故而知新」の語は『中庸』にも見えており、その鄭玄の注に「復「ま」た時に之「これ」を習ふ、之「これ」を温と謂「い」ふ」とあるのは、その傍証だろう。要するに「学習」とは「温故」なのだ。なお、現代中国語の「温習」の語は、復習する意味の動詞である。楊氏の説が卓抜なのは、「学習」の内容が明確になる点

である。「学習」＝「温故」ならば、それは「温故」の「故」、即ち古い事柄ということになる。これは『論語』に照らしても正しい。孔子は詩書礼楽を教え、弟子はそれを学んだとされるからだ。詩書礼楽とは、「周は二代に監（かんが）みて郁郁乎として文なるかな、吾は周に従はん」（八佾篇）と孔子が讃えた周王朝の古典であり、『論語』では「文」とも呼ばれている。「汎（ひろ）く衆を愛して仁に親しみ、行なひて余力あれば、則（すなは）ち文を学べ」（学而篇）。

さて、以上のことは、本章第一節が単独で一章であった可能性、ひいては本章三節が本来別々の章だった可能性をも示唆している。残念ながら、第二節については似た内容の章が『論語』には無いようだが、第三節については似た内容の章が複数見られる。「君子は能無きを病（うれ）ふ、人の己れを知らざるを病へず」（衛霊公篇）を筆頭に、「人の己れを知らざるを患（うれ）へず、人を知らざるを患ふ」（為政篇）や、「己れを知ること莫（な）きを患へず、知らるべきことを為すを求む」（里仁篇）などがそれである。

では、なぜ本来別々の章だった三節が綴輯されて一章とされたのか。考え得る理由は、この三節の末尾がいずれも「不亦（ふ）乎（亦）（ま）た（ず）や」とあるという、姿形的な類似のほかにあるまい。なぜならば、「不亦（ふ）乎（亦）（ま）た（ず）や」という意味の反語の

句法であり、例外的に勁い表現だからだ。先の例で言えば、「君子は能無きを病（うれ）ふ、人の己れを知らざるを病へず」と言うよりも、「人知らずして慍みず、亦（ま）た君子ならずや」と言う方が表現としてより勁いのである。

『論語』の言葉は、たとえ対話者が記されていないなくても、基本的に対話的である。反語表現の勁きは、眼前の対話者が自分とは異なる他者であることに由来しよう。そうした他者に対しては自分の思いを当然のように主張するのが難しいからだ。本章では、第一節で学習することに悦びを感じない他者が、第二節で遠方からの友の来訪を楽しいとは思えない他者が、第三節で人に認められなければ自分には価値が無いと考える他者が想定されていると見てよい。

姿形的に類似する反語表現を積みかけることによって、本章は『論語』の冒頭を飾るに最もふさわしい章となった。なお、姿形的な類似は、音韻的な類似でもある。この点は、そもそも『論語』が記述だけでなく、口誦でも伝承されたものであったことを彷彿とさせる。暗誦しやすい工夫をも伺える点において、本章は他章よりも格段に優れている。

臍の緒から逃れられない

古賀 啓三

(米国ミシガン州在住)

家内と庭に植える樹を買いにNurseryに行った。Nurseryは、樹木や花を買う場所なので「植木屋」でも良いのだろ
うが、おそらく何千坪もあるその敷地内に、種目ごとに陳
列される苗木の、その種目の豊富さや、業域の広さから「植
木屋」は正しくその業態を伝えてないが、詳しい説明は割
愛する。今春新たに庭に植える樹はすでに三本発注済み
だったのだが、雪融けや、降雨量の多いとき出現する、敷
地をアナーキーに横切るSeasonal Stream(季節性河川?)
に、造園業者に依頼し、石を敷くなどして秩序を付与して
もらったのだが、その流れ沿いに紅い花の咲く Dog Wood
(ハナミズキ)か、Red Bud (ハナズオウ)を植えたい、
という妻の意向で再度、「植木屋」に物色しに行ったので
ある。

基本的に僕は家や庭の美観には全く興味がない。よって
「植木屋」に同行すること自体が無意味なのだが、それで
はおまえの行為のうち、有意と確信するものを述べよ、と
問われると窮する。

家内の意に適う樹を見つけるために、「植木屋」の敷地
内を先導する、前回三本発注しに来た際にも見覚えのある
従業員に従うのだが、Dog Woodにしても、Red Budにして
も、枝振りがひとつのものとか、多枝に渡るものとか色々
あり、価格も大幅に異なったりするのである。従業員は、
説明しながら我々の反応を伺うのだが、腑抜け状態の僕に、
あんたも何か言いなさい! 「This is when you should use
your word!」と家内が叱咤する。彼女は僕に対してだけで
はなく、幼い娘たちに対しても Use your word! という表
現をよく使った。これは、字義通りにいうと、要求を言葉
で主張しろ、ということである。確かにこの国は、主張し
ないと何も起こらない国、言ったもん勝ちの国ではある。

先導する従業員は、僕より一回りくらい若いのであろう
年恰好の、といっても、すでに初老の領域に足を踏み入れ
た、白髪まじりの長髪で、無精髭にも白いものが混じり、
よれよれTシャツを着るボクサーショーツにたくし込み、
それがずり下がったGパンから露呈している、という、な
んだかもう愚図愚図の老ヒッピーなのだが、「何とか言い
なさい」という妻に同調するかのよう、僕を見て、「あの
ね、言うべきときに言っとかないと、発言力自体を失う
ことあるよね」などと諭す。こういう風体の男に諭され
ると、自分の在り方が根源的に揺さぶられるのを感じる。

ここまでを、これから書くことの枕なんだろうなあ、と思われる向きもあるやも、だけど、全くの無関係である。

今回は音楽でいうと調性のない、「無調」の文章を目指す。今月は『サンショウウオの四十九日』について書くように思っていたが、その直後に読んだ、吉田知子の『お供え』の方が面白かったので、そっちにする。

これほど「題」がストーリーのデリバリー上、能動的な機能を担っている作品を僕は知らない。独り住まいの寡婦が、このところ、毎日、朝起きると屋敷のカドに誰かが置いてゆく花のお供えに怯えるところから始まる短編小説は、その『お供え』という題にあと押しされて、読む者の注意を、遮眼車を付けられた競走馬のように、誰のための「お供え」なのか、という方向に一直線に導いてゆく。この誘導に勢いづき、前のめりになった読者をつまずかせ、つんのめさせるのが、この題のたくらみ、と、僕は読む。「毎朝、何者かに家の前の「カド」にお供えを置かれ、身に覚えのないまま神様に祀り上げられていく平凡な未亡人」という文庫の帯の惹句も巧妙な共犯なのではないか。

静かで正確な話しかたをする、うるおいのあるいい声の、市役所の何かよくわからない課の、女の素性や性向を根掘り葉掘り尋ねる牧という課長も、適性の審問官としか思え

ない。隣の空き地に「信者」たちが蝟集し、祭壇などを設え始めたことを牧に伝えると、風呂に入れ、と指示される。お風呂へ入って体の隅々までよく洗う、髪も洗うこと、出たら新しい下着と新しい服を着て、ちゃんとお化粧しなさい、あれば香水もつける、そして、外へ出なさい。身を清めて（禊ぎをして）待て、という告知。そのころには女も、もうすること何もない、これからはずっと何もない、という、満ち足りているわけではないが、不満でもない心境に至っている。そして、この心境とは、自身、「お供え」となる心境、なのである。違うか

つまらないことに気づいた。同じ短編集の表題作『脳天壊了』（僕はこのノーテンファアラという言葉を色川武大の小説だかエッセーだかで知っていて、女が自分のこめかみを指した指をクルクルパー、といったふうに動かし、ノーテンファアラ、というような書き方であった）という作品でも『お供え』同様、庭に、南天、槿、紫陽花の木が。筆者の庭にもこれらの樹木があつたのだろうか。これほどアナキーな作家、作品にも「臍の緒」はまとわりつくのだろうか。結局冒頭の庭の木の話が枕になってしまった。「無調」の文章は難しい。

散歩数寄

ムラカミヒロミ

(フライング・ブックマン)

散歩が嫌い、と書いた。無目的の時間が苦痛、だと。

しかし、そうも言っていられなくなった。

と言うのも、三月末で御役御免、晴れて「毎日が日曜日」の身分になった。なつたは良いが、生来の不精。放っておけば、一か月でも二か月でも平気で引き籠ってしまふは必定。ボケ封じと足弱にならないための対策が必要と考えた。百まで生きたい訳ではないが、せめて死ぬ間際まで、本が読めて、自分の足で歩ける状態だけはキープしたい。

そこで、一大決心し、「散歩」を挙行することにした。

今回は、戦略が明確なのだから、苦痛は少ない。曜日を決め、時間も三十分から一時間以内、とした。ずるずる、だらだらは、やはり性に合わない。

最初は、久松公園界隈。折しも花見シーズン。プロジェクト「散歩」第一号としては、上の部である。お堀端は、

満開の桜がむせ返るようであった。

のんびり花見など、何十年ぶりであったから、公園から二の丸、三の丸、天球丸と城跡を隈なく回り、巻石垣もしっかり確認、西高の横手から降りてきた。この行程で、石段の上り下りが意外に難物で、息が切れることが分かった。足には自信があつたのだが、どうやら自転車を使う筋肉とは違う部分を使うらしい。

改めて、足を鍛え直す必要性を再認識する。

第二回は、桜土手を、起点の弥生橋から終点の湯所橋まで、往復約四キロ。鹿野橋以北は人も少なく、そぞろ歩きには最適であつた。すっかり桜に酔ってしまった。

ひとつ発見。桜つて、幹から突然、花が咲くのですね。古寂びた大木の肌に、ポツンポツンと花が飛び出しているのが、何とも不似合いながら可憐。

次いで、弥生橋以東を攻略。疎らながら、桜の木が植わっており、記憶に間違いがなければ立川大橋あたりまで続く筈だ。今回は久松橋で折り返し。

無骨なブロックで護岸整備がされておらず、歩道も作られていないので、却って野趣があつて好ましい。住家の裏から、そのまま河岸に降りられるような所もあつて、ちょっ

と羨ましい。思えば、小学生の頃までは、湯所橋から市場橋あたりまでは同じような状態の草ぼうぼうであつたし、桜の木もなかったのだ。

花見シーズンも終わり、次なるミツシヨンは、街中の小道、小路を縫うように歩き回る。風変わりな建物や、庭に珍しい花木があつて、それなりの発見がある。

山裾の袋小路に、肉厚で白い花弁を星型に広げた花を咲かせている大木を見つけた。初めて見る花である。甘い香りがあたりに漂っている。香りの強い春の花といえば、沈丁花くらいしか知らないのは、はて、何という木か。わざわざ調べるのもなあ、と思つていたら、夕方のニュースで、別の地域であつたが、そっくり同じ花が紹介されていた。夏みかん、であつた。

みかんの花は常々見たいと思つていたが、機会がなく、何とはなしに柑橘類だから、爽やかでスツキリした香りなのだろう、と思ひ込んでいたのだつた。こんなに甘い匂いだったとは。そう言えば、夏みかんの実が下がっている庭を見ることは間々あつたから、単に花時を見過ごしていただけだったのかもしれない。

面白い建物もあつた。

かつては病院だつたのだろう、と思われる水色のペンキが塗られた木造建築。前庭は八重葎状態であつたから、無住になつて久しいようだ。

三階建ての木造家屋も見つけた。間口が狭く、奥に長い、典型的な町屋の構造で、波打つように、棟が続き、どの棟も黒板で数寄屋風の趣があつた。施主は相当の趣味人と見受けたが、その最奥部に、何故か三階が望楼のように飛び出しているのだ。眺望を楽しむためなのだろうが、大きさを考えると、四畳半一間がせいぜいといった所である。窓とは別に、壁にガラスが嵌め込まれている辺り、失礼ながら、あの二笑亭を思い出してしまった。

二笑亭というのは、戦前、式場隆三郎が紹介した不思議建築である。郵便配達夫シュヴァルの理想宮はシユルレアリストの賛美的であつたが、日本のそれは、精神病患者の一事例として、好事家たちの耳目を集めた。民芸的、表現主義的といった声もあつた。戦後になつても何度か復刊されているので、御存じの方も少なからう。

それでも書き続ける

三浦 永理

(青翔開智中学教員)

「わたしは今回のイベントのことは書かないので、もしよかったら、どうぞ」

と言われて始まったのが、五月十八日にあったArt Book Friends だった。文学フリマなど、各地で個人の出版物(ZINE、リトルプレスなど)が扱われるイベントがある昨今、鳥取であったのはこのArt Book Friends がほぼ初めてかもしれない。今回は、そのイベントに「鳥取でイベントに直接出られるのは最後かもしれないから」と文フリ広島にも出店した「らくだのこぶのビオトープ」のメンバーと出てきた。仲間の中には「音信不通」の寄稿者がおり、お互いネタ探しの話になったのだ。

イベントには、通い慣れた文フリの参加者とは違う雰囲気の人たちもいた。

「えー小説なんか書いちゃうの」

「今までは、ほら、名前の知られてる作家さんの本しか買ったことないから」

など、普段この手のイベントにはなかなか現れない人た

ちの素直な反応をもらう。

たしかに、自分はどやっって書いているのだろうか？

「音信不通」に書き始めるようになってから、確実に私の内的世界には書き言葉が流れるようになった。いや、実際は子どもの頃からかもしれない。それが人様の目に触れるようになったのが、この場だっただけだろう。

心の中で思う言葉をヴィゴツキーは、内言といった。内側に渦巻く言葉。言葉以前の心象風景から、自分の理解しうる形にするために、言葉になっていく。小さな頃は心の中の風景の方が、実際に目の前に広がる風景より圧倒的だった。学校にいと、他人の話を聞かなくてはいけない時が多い。話を聞きつつ、想像の世界に心を飛ばすと、時間が過ぎていく。(し、起きているので、怒られない。)

今の私の場合は、現実には目の前に起きていることと、心の中の言葉がもっと関連している。そうやって自分の言葉で語りなおしているときに、現実はずっと受け入れやすいものになる。

けれども、その全てを言葉に書いて、他者に伝える形にすることは不可能だ。自分の頭の中を常にパソコンのテキストにつないでおく。なんてことをしたら、節操もない。

私には、書き残すこととそうでないことを分ける権利がある。他人に知らせても良いことと、そうするにはどうしても自分が傷つくことを許せないこと。

例えば、五月のビオトープは、村田沙耶香の『しろい色の街の、その骨の体温の』だった。

一人の少女の早すぎる性の目覚めを描く作品では、正直、過激な描写も多いし、自分一人なら手に取らなかつたと思う。が、スクールカースト、学校が変わると輝きを失うあの同級生、ヒリヒリするような過剰な自意識。どこか既視感のあるリアルな学校の世界だった。

村田沙耶香作品をすべて読み終える勢いの参加者の方もいた。彼女は圧倒的に書き続ける作家なのだ。私も何冊か読んでみると、『殺人出産』、『コンビニ人間』と『地球星人』を読む。これらの作品の方は、より社会への違和感と、社会からの抑圧、「普通」への擬態などというテーマが、宇宙人、性被害、コンビニバイトなどの設定で描かれていた。どこか通底するテーマがありながら、物語の枠組みは違う。そこに村田沙耶香の作家性を感じる。

それらがまぜこぜになって、読書会にいったときに、私の感想はより不明瞭になっていった。さっと読んだときに受ける不気味さ、共感のできなさと、読後に残る強い共感。

理解し得るものと、理解し得ないものを感じていた。ひとりで読書する分には何も問題はなかつた。話して語るほど、自分に跳ね返ってきた。私はうまく「普通」に擬態できているだろうか。

結局、読書会后、ひとりになって私は混乱の中にいた。

今の私にはその混乱をすべて書き出す術はない。というより、書き残したくはない。が、気づいたらこの話を書いていて、その混乱の一部でも、言葉にできないか、試みる。いや、それとも、これを言葉にすることで、どうにか、これを読んでいる人に、あなたに、私のことをわかつてほしいと思っているのかもしれない。それは淡い期待だ。

それでも、私は書き続ける。「音信不通」の締切はもうすぐくるし、書きたいことは浮かんでは消えるし、それに向けて私は自分の内なる書き言葉と向き合い続けている。大きな川の流れを、庭の小川にしている。それは穏やかな流れで、見るに堪えるものだ。そうやって、ときどき自分の内なる川を見て、自分の短い人生の堆積物と思う。

また、今日も書いてしまった。

あつくなるまえに

あきの素生

(くうねるめがね)



針子が増えつつある。親めだかと一緒の水鉢に入れてい
ると食べられてしまうというので、鉢のふちで、ぴろぴろ
している小さないきものを見つけ次第、別の水槽に移して
いる。だいぶ目が慣れて来たが、久しぶりに見ると、毎度
ぎよつとするほど小さい。さらに小さな小さな二つの黒い
目が、その存在を知らせてくれる。最初はぼーっと浮かん
でいることの多い針子が、二、三日もすると、めだからし
い機敏な動きを見せる。秋生まれの針子たちはいつまでも
小さなままだったが、どんどん暖かく(というか暑く)なっ
ていく季節に生まれたこの子たちは、見る間に大きくなっ
ていくだろう。淡い新緑が色を濃くし、生命が勢いを増す
季節だ。

そんなふうに勢いづく生命たちを眺めるのは気持ちがい
いものだが、年々度を越していく暑さには閉口する。

中学の部活で靱帯を切り、ギプスで見学生生活を余儀なく
されていた頃、顧問の先生から、プールでできるリハビリ
メニューを組んでやると言われ、足の痛みを忘れて浮かれ
ていたら、その年に限って、水不足によりプールが使用禁
止となった。七月の出来事だ。かつてない猛暑、という年
だったので、運が悪かったな、と自分に言い聞かせ、体育
館の片隅で、ひっそりとリハビリしていたのを覚えている。
その年の地元の七月の平均気温は三十度強。最高気温三十
八度越えの日があつたようだ。三十度を超えたら「今日は
暑いなあ」と辟易していた当時としては確かに異例だが、
今ならあり得なくもない暑さだろうか。三十一、二度は下
手したらエアコンなし扇風機のみでがんばられてしまう気温
だ(がんばる必要はないし、がんばらない方がきつといい)。
それを思うにつけ、このところの尋常でない暑さとわれわ
れの適応力に改めて驚かされる。

ニュース番組で暑熱順化について取り上げられているの
を見た。熱中症対策として、本格的に暑くなる前に体を暑
さに慣らしておこう、てなことで、少し負荷のかかる運動
や入浴、鍋を食べることを勧めていた。早々に休日の昼食
を冷麺やそうめんに切り替えている身としては、鍋をしよ
うという気持ちにはなかなかない。冷たいもののほか、

しゅわしゅわしたもので酸っぱいものを早くも体が欲し始めている。そこを押してやるべし、ということなのだろうが。

自分が日頃実践していることの中で、唯一暑熱順化に貢献しそうな取り組みが、サウナである。以前、「ととのう」とは何ぞや、みたいなことを書いた。その後もぼつりぼつりとサウナに通っていて、自分なりの「ととのう」の感覚もつかめてきた。

サウナの中で十分程度耐え、水風呂に一、二分。その後、湯船の外でぼんやり座っていると、「ととのう」がやってくる。ととのうのついているときは、風呂場のガラスについている水滴を眺めるのが好きだ。照明が反射している水滴ならなおよい。そうしているうちに、いつのまにか「ととのう」が去っていく。汗をしつかりとかくので、暑熱順化にも役立っているはずだ。おそろく。

先日、サウナ用めがねなるものを見かけ、旅先にもかかわらず、一も二もなく入手した。全国チェーンのめがね屋さんなので、こちらに帰ってから購入すればよいようなものだが、「これは今最も自分に必要なめがねだ！」と感情がたかまり、それを押さえることはしなかった。

温泉などでは前に使っていためがねをかけるというのが、めがねにまつわる我流ライフハックだ。いうまでもなく、めがねが傷むからである。しかし、サウナはあまりに高温なので、めがねを持ち込むことができない。めがねをけけずにサウナの中で十分あまりを過ごすことは、未熟な自分には苦行のようなものだ。行きつけのサウナにはテレビが置いてあり、それを漫然と眺めているだけでも、かなりの助けになる。めがねが無いと、知らず知らず目をしかめて、無理に画面を見ようとしてしまい、疲れを取るためのサウナで疲れるはめになる。そもそも、めがね無しでうろつくのはどこであれ危ない。

そんな現在進行形の悩みを解決してくれるめがねが目の前に現れたのだから、飛びつくほかない。自分と同じ悩みを持つひとがたくさんいたのだなあとしみじみし、それに応えるめがね業界の心意気を感じ入った。その場でめがねを作り、自宅に宅配してもらう手続きをして、お店を後にした。

その後、めがねは無事届いたが、まだ使用できないでいる。本格的に暑くなる前に、めがねとともに熱されたい。

「それからの定有堂」 その二十七

接続詞を捨てて

奈良 敏行（笈の定有）

定有堂事務局の目と鼻の先に SHEEPSHEEP BOOKS がある。

先日、数少ない新刊コーナーに、つまり選りすぐりの一角に、岩波新書『ケアと編集』が数冊も面陳してあった。医学書院「ケアをひらく」シリーズの名編集者、白石正明さんの退職後の本なので、迷うことなく購入した。

退職にあたって『精神看護三月号』（2024）に、二十五年間担当してきたこのシリーズ四十三冊の総まとめ解説を掲載している。一貫した思想は「視点が変わるとすべてが変わる」という発見だった。

とくにわたしの心に残ったのは、「なるべく接続詞は落とした」という一言だった。

《接続詞を外すと文と文との間にスペースが生まれる。そこを読者が読み込むですね。スペースがあるからこそ、読者が入り込めるといふメカニズムをそのとき知りました。》

そのときというのは、ALS（筋萎縮性側索硬化症）的

日常を描き、大宅壮一ノンフィクション賞を受賞した『逝かない身体』を編集したときの気づきだ。

接続詞の役割は普通「先行する語や文節・文を受けて後続する語や文節・文に言いつづけ、それらのものの関係を示すはたらきをもつ語」（『デジタル大辞林』）と説明される。例えて言えば道路標識のようなものだろうか。明快な文章は一足早くつながりの予測を大事にする。白石正明さんの真骨頂は、接続詞を捨てるといふ一事に集約されるのかと感動し、それからわたしもなるべく省くように心がけた（あ、「それから」は不要か）。

『ケアと編集』でもこの信念は展開されるのかと、頁をめくるのを楽しみにした。「接続詞はドアを閉める」という小見出しがあった。やはり『逝かない身体』のところで語られる。

《接続詞なんていうものは、うまくつながっていない文章を無理やり意味ありげに見せるときこそ必要なかもしれない。》

「説明文なら接続詞は多くなる」、しかし『逝かない身体』は説明文でない。

《最後は言葉拔きの身体的な交わりを、常識の外で開拓していく姿を描写する書物である。それは説明ではなく、究極の関係を「体験」するための本なのだ。》

《文と文とのあいだが緩いと、すきまに入ることができる。(略)それが文章を体験するということだ。》

『ケアと編集』は「ケア」に学んだ編集術という主題の本だ。具体的には「浦河べてるの家」ソーシャルワーカー、向谷地正良さん、そして『リハビリの夜』の著者熊谷晋一郎さんに教わる。熊谷さんは脳性まひでありながら小児科医、同時に当事者研究の学者でもある。

《小さい頃から自分の身体や自分を取り巻く世界が把握できなくて、ずっとその感覚や思いを語る言葉を持てずに、不安と恐怖のなかを生きてきたあなたに》

という書き出しの綾屋紗月・熊谷晋一郎『つながりの作法』を定有堂では一つの入口として展開してきた。入口とは、多数派と少数派の常識が入れ替る、世界の扉のことだ。分かるとは自分のモノサシで計ることだ。一歩進めてモノサシが違えば分かるものも分からなくなる。本を読むとはそういうことではないかということの形にしてみる。秩序との反転、そこには目眩のするような読書の楽しみがある。たくさんのモノサシに出合うところに読書が導く「自由」の体験がある。

本屋である定有堂は『つながりの作法』を入口とする。編集者である白石正明さんは、結局「接続詞を捨てる」という発見で「ケアをひらく」という大シリーズの入口にし

たのではないかと想像してみた。

白石さんは横道誠著・村中尚人解説の『海球小説』やニール・プランディン『動物感覚』もこの本の中で勧めている。前者は発達障害者が多数派の星「海球」の物語だ。後者は中井久夫さんに教わった本だと紹介する。そこでは「言語によって世界は簡略化され、枠付けられていく。人間というモノサシが反語的に変容するのだ。すでに入手したが、いずれゆくり読んでみたい本だと思った。

2025. 04. 28

(参考)

白石正明『ケアと編集』岩波新書 2025

『精神看護三月号』医学書院 2024

川口有美子『逝かない身体』医学書院 2009

熊谷晋一郎『リハビリの夜』医学書院 2009

綾屋紗月・熊谷晋一郎『つながりの作法』NHK新書 2010

テンプル・グランディン・キャサリン・ジョンソン『動物感覚』NHK出版 2006

HK出版 2006



案内



ドラメリア (座敷わらし)



定有堂教室「読む会」 (講師 岩田直樹氏)

定有堂教室「ドウルーズを読む会」

定有堂教室「読書室ビオトープ」

それぞれ会場は とりぎん (県民) 文化会館



・定有堂教室と太極拳の詳細は

下記の、QRコード参照



定有堂教室案内サイト (@ドラメリア)

『音信不通』紙版の置き場

・県立図書館2階パンフコーナー・森の生活者

・邯鄲堂・上田ビル (ボルゾイレコード) ・食堂カルマ

・SHEEPSHEEP BOOKS (定有堂ビル2階) ・エスキース (倉吉)

・定有堂ビル2階「音信不通」編集部

・編集後記:

荻窪の本屋「Tie」で開催された『本屋のパンセ』特集展示に行った人から、写真を見せてもらえました。定有堂の空気が伝わる丁寧な展示。素敵ですね。

来月 (これが出る頃には今月) 東京に行くときに寄れないかな...と思案中です。

水原涼さん (作家) に「寄稿いただきました。新刊刊行記念です。

・水原涼『恋愛以外のすべての愛で』星海社 六月十八日発売

・水原涼『筏までの距離』集英社 六月二十六日発売

ドラメリア (編集長)

「週刊読書人」59号に『本屋のパンセ』の書評。星野文月さん執筆。『プレジデント・オンライン』525公開で三宅玲子さんレポート (Tie) での定有堂展示会、ありがとうございました。内田克彦さんが「音信不通」連載の『鳥取あれこれ』を小取舎から上梓されました。白井明大さん『ヘリヤII』《結び手》詩之友社から刊行。2025

奈良敏行 (発行人)